

1. 適切な野生復帰事例

(1)ハリヨ <絶滅危惧ⅠA類(CR)>

 <p>ハリヨ</p> <p>◎滋賀県立琵琶湖博物館</p>	<p>■野生復帰の背景</p> <p>○滋賀県天野川水系地蔵川では、ハリヨの仲間であるイトヨが人によって放流されたことにより、ハリヨとイトヨの交雑が進んでいることが分かった。</p> <p>○滋賀県立琵琶湖博物館等では交雑する以前のハリヨの個体を飼育(生息域外保全)している。また同水系の別の支流に交雑していないハリヨが発見されている。</p>
 <p>イトヨ</p> <p>◎岐阜県世界淡水水魚園水族館</p>	<p>■適切な野生復帰のポイント</p> <p>☆同博物館、地蔵川とハリヨを守る会、ハリヨ問題検討会、滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課、米原市教育委員会等の関係機関が協力体制を築き、地域住民との合意を踏まえながら野生復帰の検討を進めている。</p> <p>☆遺伝子解析の結果や生息地調査の結果などの科学的データをもとに、交雑個体をどう除去するのか、琵琶湖博物館の個体を野生復帰するのか、または別の支流の個体を増殖して野生復帰するのかを有識者会合で検討している。</p>

(2)オキナグサ <絶滅危惧Ⅱ類(VU)>

 <p>◎久原 泰雅</p>	<p>■野生復帰の背景</p> <p>○新潟県魚沼市の中山間地域が県内の唯一の生育地があったが、平成16年の新潟県中越地震にて、生育地である水田の畦が崩落したことで、個体数が大きく減少した。</p> <p>■適切な野生復帰のポイント</p> <p>☆平成21年に、新潟県立植物園の監督のもとで、新潟県魚沼市広神西小学校にて種子からの栽培を行い、これを魚沼市や地域住民が連携し、生育地への野生復帰を行った。</p> <p>☆50株以上から種子を採取して栽培することで、集団内の遺伝的多様性を確保している。また、本種は風で散布する種子を持つので、風上にあたる地域に植え戻すことで、将来的な自然種子散布にも配慮した。</p> <p>☆魚沼市と新潟県立植物園の協働によるシンポジウムの開催や農村環境の植物調査を通じて、オキナグサをはじめとする里地・里山・水環境と植物の保全を推進しており、これと併せて野生復帰の取組みを継続している。</p>
--	--

2. 個体導入により悪影響が懸念される例

(1)メダカ(北日本個体群、南日本個体群)<絶滅危惧Ⅱ類(VU)>

 <p>◎(財)自然環境研究センター</p>	<p>■個体導入の概要</p> <p>☆遺伝子解析によりメダカは北日本集団と南日本集団に大きく分けられ、さらに地域により細かく異なることが判明している。</p> <p>☆絶滅危惧種で知名度も高いため、各地で保全活動が進められている一方で、他の地域からの放流も行われており、全国的に遺伝的攪乱が生じている。</p>
---	---

(2)ゲンジボタル

 <p>◎(財)自然環境研究センター</p>	<p>■個体導入の概要</p> <p>☆中部山岳を境に東側では4秒間隔で、西側では2秒間隔で点灯する異なる集団があり、全国的に遺伝子解析した結果、合計6つの集団があることが解っている。</p> <p>☆観光目的や街おこしのイベント、また自然環境保全のシンボルとして他の地域からの導入が行われており、特に東京都では、中部や西日本に見られるタイプが多く定着していることが分かっている。</p>
---	---